

## 守屋忠之\* カスミザクラとその仲間

Tadayuki MORIYA : *Prunus verecunda* and its Related Species in Japan

本邦に産するカスミザクラは、葉面、葉柄、花柄に生ずる毛の有無、その有毛度および花序の形態により2・3の変種に識別されている。私は多くの標本と秩父山地の海拔約900m前後の山地における自生品についての調査から、これらの分類形質には著しい変異のあることを認め、更に個々の形質の変化と、分類形質との関連について明かにすべく多くの生品と標本にあたり観察を継続した。ここに観察の結果をまとめ個体間の変異をのべ、分類形質の扱いにもふれたいと思う。この研究を進めるにあたり、種々指導をいただいた東京大学教授倉田悟先生、また標本の閲覧を許された国立科学博物館の奥山春季先生にお礼申し上げる。

1. **カスミザクラの変異** サクラ類は一般に多型であることはよく知られている。すでにヤマザクラ、オオシマザクラの変異に関してはよく知られ、報告もある。

しかしカスミザクラに関してはその詳細は明らかでないようである。まず葉芽の色から論じよう。葉芽の色の変化はヤマザクラ、オオシマザクラと大差なく、はじめから緑色のもの、緑色に褐色か茶褐色がうすく入つたもの、またうすい茶褐色を示すもの、著しい場合は濃茶褐色、うすい紅紫色から濃紅紫色のものまであり、その色調は変化に富む。しかし一般的には緑色に褐色か茶褐色がうすく入つたものが多い。成葉では濃緑色から黄緑色、その中間である緑色のものもみられる。鋸歯については、あまり変化はみられず、はつきりした重鋸歯で、鋸歯は短かく広く、先は芒状か、短かい腺におわるが、概して短かい腺におわるものが一般的である。また葉形も卵円状だ円形、倒卵円形、倒卵形、だ円形、長だ円形、線状だ円形と複雑な変化を示し、 $4.4 \times 2.2\text{cm}$ 、 $9 \times 6.2\text{cm}$ の狭長な葉形、 $7.5 \times 4.5\text{cm}$ ~ $7.9 \times 4.6\text{cm}$ とやや円形に近い葉形を示す個体もあり変化の幅の広さがうかがわれる。葉の先端は普通鋭尖頭におわるが、尾状に長くのびる個体もある。葉脚は歪形、円形、楔形、浅い心形と形態は一様でない。葉柄は普通帯赤色で、2個の密腺は葉柄上に有り、葉脚、葉縁には位置しない。葉下面は一般に淡緑色をおびるが、秩父山地の東縁につらなる山地、秩父三峯山、身延山等に自生する個体のなかにはヤマザクラ的に白味をおびた淡緑色の個体がまれにみられる。

次に葉の各部に生ずる毛の有無および有毛度の変化であるが、カスミザクラの諸形質の変化のなかで最も個体間の差異のはげしさがうかがわれる。葉の各部が全く無毛のものから、多毛な個体まで変化の幅は広いが、全く無毛の個体(花柄、小花柄も無毛)はごくまれにしかなく、私が検した65個体中わずか3個体にすぎない。他の個体は何れかの部分に有毛な個体で、その程度は千差万別である。有毛な個体について、毛の生ずる位置、量および毛の性質、またそれぞれの形質の組合せ型による観察結果は後述する通りである。し

\* 埼玉県秩父市立秩父第二中学校  
Chichibu Daini Lower Secondary School, Chichibu, Saitama Pref.

かしその変化のなかで、葉上面散毛を生じ、下面無毛、葉柄に開出毛を生ずる個体が一般的である。葉の各部に生ずる毛は葉が固有の大きさに成長したのちまで宿存するものと思われるが、一部には脱落するの量的に少なくなる傾向を示す個体もみられる。また同一個体のなかでも枝条の上・下部および中央部とで毛の多少、また生ずる位置等にも差異のみられる個体もまれにはある。また一般には若木と老木とで有毛の程度、有無の関係が論ぜられるが、かなりの若木でも無毛に近い個体、老木でも葉の各部にやや深く生ずる個体がみられる。樹令による差異は概して認められないと思われる。

花にあつては花径20~30mmを示す個体が最も普通であるが、まれには40mm以上におよぶ花径の個体もある。また花卉の長さ12~14mm、幅8~9mmを示す個体が最も多く、まれには19mmに達する個体もある。花卉の色にも変化がみられ蕾時、蕾の先はこいさくら色、あるいはうすいさくら色の個体が殆んどで、両者の間には連続的な変化が認められる。これらの個体は開花してのち、白色となるものが普通である。

しかしそのまま弁辺かあるいは花卉全体を濃く、ときにはうすくいろいろ個体もみられる。開花後、濃いさくら色をおびる個体はまれである。しかし凋落時花卉基部（または全体）および雄蕊が濃紅紫色~暗紅紫色に変化する傾向にあるものが殆んどである。また開花時より雌雄蕊ともに濃紅紫色~暗紅紫色に染まる個体もまれではない。また重弁化の傾向にある個体もまれにはみられるが最高12枚、平均6~7枚の花弁数に増加した個体が多いようである。花卉の形態にあつては、ほぼ円形に近いものから長だ円形、広卵形、狭卵形と変化がみられるが花卉の先は例外なく凹入する。

花は殆んどの個体では水平に開くが、なかにはエドヒガンのように平開しない個体もみられる。またほぼ円形に近い形態を示す花卉のなかには、弁辺が重り合うウメザキ型もみられ、花卉が狭長なものはスカン型となる。弁辺が内側、外側にまきこむもの、波うつもの等さまざまである。花柱および雄蕊は無毛を常とするが、なかには花柱に有毛の痕跡を残す個体もまれにはみられた。

サクラ類を分類する上で比較的安定した形質として萼筒の形が論ぜられるが、カシミザクラにあつても著しい変化はみられず、細いかね形と基部の細まるかね形の2型がみられるのみである。また萼筒の毛は他の部分に生ずる毛の量とは関係なく無毛か、わずかに毛を散生する程度である。萼筒（裂片も含む）の色も変化多く、はじめから緑色のもの、鮮緑色のもの、また暗褐色のもの、暗紅紫色のもの、そのなかに緑色が入るもの等みられるが、濃淡の程度にはかなりの差異がある。また萼裂片は殆んどが無毛であるが、まれに辺縁に毛を生ずるもの、微毛を散生するものもみられる。さらにその大きさ、形態にも変化がある。だ円形、長だ円形、広披針形、広卵形等、形態はさまざまである。普通萼裂片は全縁であるが、鋸歯を有する個体、また歯牙状の凸起のある個体もみられるが、まれである。

花序の形態は散房状花序を示す個体と散形状花序を示す個体とがある。散形状花序の場合、花柄が全く発達せず小花柄が1点からでて散形状となるものと短かい花柄が発達するものがある。私が検しえた範囲では花柄が発達する散形状花序となる個体が殆んどで散房状花序となる個体はその頻度において低率である。また一さく葉標本中にも両花序の

形態を示すものが混じる場合もある。しかしその多くは散形状花序の個体である。一花序中の花数は最少1花で、最高5花をかぞえるが2~3花が最も普通である。小花柄の長さは10~12mmの個体が多く、30mm以上におよぶ個体もある。花序も有毛のものが普通であるが、その程度も葉と同様千差万別である。花序および花柄が全く無毛のものはまれで65個体中9個体をかぞえ、葉の各部とともに全体に無毛のものは、わずかに3個体をかぞえるのみである。

開花期については高度差を考慮し高所に自生するもの（その自生は約1000mまでおよぶ）は平地から順次に開花がおくれ、約1ヶ月の遅速がある。平地で最も早いのは3月下旬には開花する個体があるが大むね4月中旬であろう。開花する多くの株について観察するに開花と同時に葉をよく伸展するものと、伸展しない葉を有する個体等の変化もみられる。以上観察の結果を中心にのべてきたが、上にのべた諸形質の変化は同一環境内にある個体間の差異であつて、環境とは独立した形質の変化であると考えられる。

これを要約すると

- (1) 若葉の色の变化、葉形、花の大きさ、花色にも多くの变化がみられる。
- (2) カスミザクラにあつてはとくに、葉の上下面、葉柄、花柄に生ずる毛の有無、有毛度、質等の変化が著しい。
- (3) 花序の形態には花柄の発達する型、発達しない型の2型がある。
- (4) 重弁花の傾向にある個体がまみられる。
- (5) 葉裏がヤマザクラ的に白味をおびた淡緑色の個体もあり、今後検討を要する。

カスミザクラに関してはいろいろな問題が他にもあろうかと思うが今後も観察を継続したいと思う。

2. **カスミザクラの分類** つぎにカスミザクラ種内を、葉面、葉柄、小花柄に生ずる毛の形質と花序の形態とによつて識別した分類群についてふれたいと思う。カスミザクラは始め小泉源一(1911)によつて羽前和田村の採品にもとづいてヤマザクラの変種として記載命名され、ついで KOEHN が種に引きあげた。<sup>\*</sup> その後中井(1930, 1933)は日光産のものからアサギリザクラ var. *intermedia* NAKAI, 北海道日高産のものからエゾノカスミザクラ var. *yesoensis* NAKAI を、また原(1955)は北海道日高産のものからウスゲカスミザクラ var. *pubipes* HARA をそれぞれカスミザクラの変種として記載命名した。これらの変種またはそれらを格下げした品種は各著者の記載によれば基準型と表示した諸点で異なる。すなわちエゾノカスミザクラは花柄の発達した散房状花序をなし、アサギリザクラ、ウスゲカスミザクラは毛の量、質においてそれぞれ特徴がある。まず花序の形態からのべよう。観察の結果からカスミザクラには花柄の発達する型と発達しない型の2型がある。花柄の発達する型はさらに散形花序をなすものと散房花序をなす個体とに区別される。しかし頻度からみれば散形花序(無梗型のものもふくむ)がまさり、散房状花序の個体は前者の約1/3にすぎない。また花柄の伸長度においてもその長・短の個体差がみとめら

\* *P. verecunda* KOEHN, Fedde. Repert. Nov. Sp. XI (1912)

種 類	毛の有無と性質				花 序 の 形 態
	葉面	下面	葉 柄	小花柄	
<i>Prunus jamasakura</i> var. <i>verecunda</i> KOIDZ.	軟毛	無毛	軟 毛	細毛	花柄のない 散形状花序
var. <i>intermedia</i> NAKAI	微毛		無 毛	無毛	
f. <i>intermedia</i> SUGIMOTO**	微毛			無毛	花軸なし
var. <i>yessoensis</i> NAKAI			微毛か 無毛	微毛	花柄のある散形状花序
f. <i>yessoensis</i> TATEWAKI			多 毛	有毛	花序に花柄がある
var. <i>pubipes</i> HARA			上面細 軟毛	無毛	短かい花梗
f. <i>pubipes</i> TATEWAKI			有 毛	無毛	短かい花柄

れる。また同一個体中に両形態をみとめることも時にはある。小泉が記載した個体がたまたま花柄の発達しない散形状花序のものであり、中井がエゾノカシミザクラとした個体がたまたま散房花序を示す個体であつたのであろう。両型とも連続する変異のなかの一つの形態であつて、その区別の要はなくカシミザクラの範囲内で扱うのがよいと考える。

つぎに毛の形質に関して観察に供した65個体を毛を生ずる各位置における有無についてみるに、葉下面有毛の個体は約28%にあたり、葉柄有毛の個体は81% (検しえた65個体中葉柄上面のみに毛を生ずる個体は3個体)、小花柄 (花柄も同様) 有毛の個体は80%となる。これらの各部分の毛の有無の形質が集合し組合さつて1個体ごとに毛の形質が具現される。その組合せを示せば概略次のように類別される。(1)、葉上下面、葉柄、小花柄に毛の深い型 [とくに葉柄、小花柄 (花柄も同様) に著しい]。(1a)葉面、葉柄、小花柄に毛の深い型で葉裏無毛のもの。(2)、(1)に似るが葉面、葉裏中肋、脈上、葉柄、小花柄に毛の深い型 (幼葉時各部分に毛が著しい) (3)、葉面散毛、葉裏無毛、葉柄、小花柄に開出毛が著しい。(4)、葉面、小花柄は微毛、葉裏中肋基部から葉柄に開出毛が著しいもの。(5)、葉上下面、葉柄、小花柄微毛。(6)、葉両面微毛、葉柄無毛、小花柄無毛。(7)、葉面、葉柄に微毛、葉裏面、小花柄無毛。(8)、葉面のみ微毛、葉裏、葉柄、小花柄は無毛。(9)、葉上下面、葉柄、小花柄無毛。等の9つの型となる。総合された1個体の形質は、さらに毛の質および花序の形態が加味されて表わされなければならない。その形質の組合せはさらに複雑とならう。したがつてカシミザクラから識別されたエゾノカシミザクラとウスゲカシミザクラは連続する個体変異に対する命名としか受けとれない。しかし、これらの変異のうち、毛の量について各部分が全く無毛な個体、多毛な個体はかなりはつきりした形質と考えられるので従来通り、アサギリザクラとしてその無毛品 (葉面のみ微毛を生ずる個体もふくめ) を認めたいと思う。この型の個体は各地にみられ、国立科学博物館さく葉庫にて検しえた標本の産地を下記にあげる。越後弥彦山 (1949, 伊藤至), 上野富士見村 (1955,

\*\* 杉本順一 (1965): 日本樹木総検索表 (増補改訂新版) で、品種として扱われている。

若名東一), 信濃戸隠上水高原 (1960, 久保田秀夫), 近江河原 (1948, 橋本忠太郎), 渡島アツサブ村 (1950, 中井・丸山), 羽前奥山寺 (1947, 奥山春季), 佐渡経塚山 (1939, 池上義信), 羽前北村山郡向原 (1946, 奥山春季), 武州秩父別所・同高篠山 (1966, 守屋忠之)。

終りにカシミザクラの多毛の一型としてチヨウセンヤマザクラ *P. Leveilleana* KOEHNÉ にふれなければならない。

チヨウセンヤマザクラ\* は KOEHNÉ (1912) によつて記載発表され, 中井 (1941) が加賀・兼六公園の栽培品から日本産を記録したものである。中井の記載によると, 葉柄には開出する細毛があり, 葉上面には疎長毛, 葉下面中肋, 脈上に毛茸があり, 花柄は短かく有毛で鱗片中にかくされ, 小花柄にも毛茸のある多毛の個体である。また KOEHNÉ はその記載のなかで, とくに若葉の下面は軟毛を深く生ずることをのべている。また WILSON (1916) もその著書のなかで *P. Leveilleana* KOEHNÉ は葉上下面, 中肋側脈上に毛を生ずる個体であることにふれている。

また中井 (1915) は朝鮮産のサクラ属を扱つたなかでヤマザクラの変種としてピロウドヤマザクラ\*\*を記載命名しているが, その記相文に「花は葉とともに生じ, 葉柄は極めて密毛を生じ, 葉裏の中肋にも密毛を生じ花柄にも毛多し」と記されているところから *P. Leveilleana* KOEHNÉ と同物異名のものと考えられる。このように葉上下面, とくに下面中肋, 脈上, 葉柄, 小花柄に密毛を生じ KOEHNÉ が記載文で注意した幼葉時とくに密毛著しい個体は, カシミザクラの変異のなかでもかなりはつきりした形質のものである。秩父地方でも二子山南麓, 長尾根, 高篠山にみられる。カシミザクラの多毛の型と考え, ピロウドカシミザクラの和名を与え品種として扱いたいと考える。

### Summary

The author studied critically the morphological variation of *Prunus verecunda* not only on many herbarium specimens but in the field. The results are as follows. It would be more accurate and convenient to include f. *yessoensis* and f. *pubipes* in the typical category. But the following two forms (glabrous and densely pubescent) are to be recognized.

(1) f. **intermedia** (NAKAI) SUGIMOTO

(2) f. **tomentella** (NAKAI) KUBOTA et MORIYA comb. nov.

*P. serrulata* LINDL. var. *tomentella* NAKAI, Bot. Mag. Tokyo 29 : 140 (1915)

*P. Leveilleana* KOEHNÉ, SARG., Pl. Wils. 1 : 250 (1912)

\* SARGENT : Pl. Wils. Vol. 1 (1912); NAKAI : Notulae ad Plantas Asiae Orientalis (XXXI) Journ. Jap. Bot. Vol. 20 (1944)

\*\* *P. serrulata* LINDL. var. *tomentella* NAKAI Bot. Mag. Tokyo Vol. 29 (1915)